

男

たちの聖域を探るうちに、気づいたことがある。そこには独特の「制度」が

くつついているということ。ワイナリーしかり、アメリカズカッブしかり。

男が集うところ、そこに制度ができる。そういえば「ビーチ・ジョーン」の野口美佳社長が、ある男性誌のインタビューでこんなことを言っていた。「会社ってそもそも、その組織の作り方にしろ、仕事の進め方にしろ、すごく男性的というか、男の発想なんです」
きわめて個人的な趣味に見えることでも、それをわいわいと楽しんでいる男たちを追っていくと、独特の制度にいきあたると。たとえば、ハーレーダビッドソン。

ハーレーはモーターバイクでありながら、ただのバイクではない。ハーレーのオーナーになるとともに、ひとつの新しいライフスタイルが開けることになっている。パーツを選ぶ、自分仕様にカスタマイズする、それをオーナー同士で披露しあうイベントに参加する。「チャプター」(支部)や「イベントグラウンドスラム」(年5回以上イベントに参加したメンバー)などの特殊専門用語がとびかうハーレー・オーナーズ・グループとエ〇の(ホグ)が導くライフスタイルこそ、一大制度である。

こんな制度そのものがマッチョなツボをくすぐるといえるのは理解できないこともないが、オーナーズクラブなら四輪のマ

Sanctuary of the Lost Samurai

中野香織の「落日のマッチョ」

マッチョの集うところ「一大制度」あり

モーターバイクの最高峰、ハーレーダビッドソンに乗るオトコたち。ヘルメットの下には、私たちがうっとりさせる少年の笑顔が隠されているのだろうか。

Text by Kaori Nakano

シンにもある。なぜ、ハーレーが別格なのか？

このギモンに答えてくれたのは、MOTO ZINE 編集長の河西啓介さんである。



「基本的にマシンは高性能を追求する宿命にありますが、ハーレーはスピードやコーナリング性能はどうでもいいと思っているふしがあります。ハ鉄馬Vとたとえられる、生き物のようなエンジン

歩で進化するバイクのなかで、偉大なるローテクを保っているのが、ハーレーなのです」

マシンを愛する男は新し物好き、と思いついたが、浅はかだった! どっしりと「変わらないこと」がハーレーの力であったとは、近年、大人になる

過程でいちど「捨ててきた」バイクに再び乗る、つまり「若い頃の自分を取り戻す」(河西さん分析)べくバイクにまたがる大人の男も少なくないらしいが、そんな「ア

クティブエルダー」

(エ〇の界では50歳以上の活発なライダーをこう呼ぶ)のプライドも、ハーレーを選べば、きょうびのハイテクによって傷つけられる心配

が少ないわけですね。

しかも、カスタムでつけられるサイドカーがあるが、あれは老妻をのせてツーリングするためというほのぼのしたものではなくて、停止中に、やや弱ったエルダーの脚にかわって、車体を支えるためのものであるらしい。まさに「落日のマッチョ」とともに走る、やさしくも悠々たる王者ハーレー。

もちろん、若い男女にもハーレー乗りは多い。この現象を支えるのは、10年払いの1200回ローンであったりするそうである。10年後も愛車であり続ける確信があるのは、すごいことだ。

オレ好みに変えて、未永く愛することができると、つまり男の「情」をたっぷり受けとめてくれる、艶やかなマシン。それにまたがり、全身をさらして走る孤独なスリルを味わい、ときにはわかる仲間と愛車自慢会。ハ男の子Vの原初的な(失礼)本能の輝きが、ハーレーワールドには見え隠れします。



中野香織 (なかの・かおり)

服飾史家・コラムニスト。1962年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。ジャン・グリゾーニ装幀による「着るものがない!」(新潮社)が近日発売予定。

1. 映画「ハーレーダビッドソン & マルボロマン」では、ミッキー・ローク演じる主人公の呼び名が「ハーレーダビッドソン」そのもの。 2. クレイジーケンバンドのやんちゃバイク組メンバーが本牧のガレージに集合。子供の笑顔に戻るつかの間。 3. 2003年6月、パルセロナで開催されたハーレーダビッドソン100周年のイベントに集結したライダーたち。今月は彼らに五つ星を進呈。



Special thanks: Shinya Horiguchi(CRAZY KEN BAND), Mandom Auto Yokohama. Photos from top: MAMU ZUMA Press/PINET.com, MAURY CHRISTIAN/GAMMA LIAISON